

ときめきよろめき

フォトグラフ

登場人物

1. 鶴田夏美
2. 福沢ゆき絵
3. 近藤 愛
4. 沖田聡美
5. 西郷茉莉

6. 松本由美子先生
7. 夏美の母

8. ベンチ 1
9. ベンチ 2
10. ベンチ 3
11. 椅子 1
12. 椅子 2

13. 生徒たち

◆七月一日(日)

「カシャッ」というシャッターを切る音とともに、背景にケヤキの大木の写真が映し出される。続いて、劇のタイトル『ときめきよろめきフォトグラフ』という文字がその写真に重なって映し出される。

写真とタイトルが消え舞台が明るくなる。そこは七つ森公園。木々に囲まれた緑あふれる公園である。ただし舞台上には木々を見ることはできない。客席中ほどにケヤキの大木が立っているという想定で劇は進行していく。

舞台上には三つのベンチと二脚の椅子が置かれている。

一人の少女が客席に向けてカメラを構えている。映しだされたケヤキの写真を撮ったのはこの少女である。少女の名前は鶴田夏美。七つ森中学校の二年生で写真部に所属している。少女が何枚か写真を撮る。

夏美は、突然双眼鏡を取り出し、何かを眺め始める。

双眼鏡はケヤキの大木の梢の方を向いて止まる。

舞台後方のベンチに腰を下ろして読書をしている少女がいる。

少女の名前は福沢ゆき絵。

ゆき絵は夏美に関心を持ち、読書をやめて夏美の様子をじっと見ている。

ゆき絵が夏美に近寄る。

夏美は双眼鏡で何かを見るのをやめて振り返る。そして、自分を見つめているゆき絵に気がつく。戸惑いを感じるゆき絵。

夏美 福沢先輩、ですよ。

ゆき絵 私のこと知ってるの？

夏美 ええ…、先輩成績がいいんで有名ですから。ずっと学年一とか…

ゆき絵 …

夏美 先輩、この公園でいつも何読んでるんですか？

ゆき絵 あっあれ、…あれたいしたものじゃないから。

夏美 教えるとまずいものなんですか？

ゆき絵 そういうわけじゃないけど。

夏美 …

ゆき絵 あなたは？

夏美 …

ゆき絵 あなたは何見てたの？鶴田さん。

夏美 私のこと知ってるんですか？

ゆき絵 (頷いて)二年生で一人だけの写真部員。でしょ？

夏美 はい。

ゆき絵 で、何？

夏美 …

ゆき絵 何見てたの？

夏美 …たいしたものじゃないですから。

ゆき絵 …

夏美 本当にたいしたものじゃないですから。

ゆき絵 教えるとまずいものなの？

夏美　　そういうわけじゃ…

ゆき絵がくすりと笑う。

夏美もつられて笑い出す。

夏美　（ケヤキの梢を見た後、ゆき絵の方を向いて）誰にも言いませんか。

ゆき絵　（うなずく）

夏美　ほんとに、誰にも

ゆき絵　言わないって。（ここで写真部員三年の茉莉と聡美がこの場所に向かっているのに気がついて）今日はいい。今度教えて。じゃあね。

ゆき絵が帰っていく。

ゆき絵が帰ったのとは反対方向から、聡美と茉莉が現れる。

聡美　おはよう。

茉莉　おっす。

聡美　もしかして夏美も呼ばれたの。

夏美　はい、愛先輩から七つ森公園に集合ってメールが入って。

聡美　何だろ？

茉莉　さあ…

ゆき絵が帰った方向から愛がやってくる。

愛　　おはよう。

みんなが反応する。

愛　　あーあ、嫌なやつに会っちゃった。

聡美　誰。

愛　　福沢ゆき絵。

聡美　あれ、それじゃ今さっき夏美がここで話してたの、ゆき絵？

夏美　はい。

聡美　知ってるの？

夏美　話したの、今日が初めてです。

愛　　ゆき絵と、話したんだ。

夏美　話したっていっても、ほんのちょっとで、すぐ福沢先輩行っちゃったんで…

愛　　ゆき絵と何の話したの？

夏美　何の話って…福沢先輩ってずっと成績が学年一ですよって、

愛　　ところがさ。あいつ、この間の中間試験でついに学年一番の座から転落したんだ。

聡美　それ、ほんと？

愛　　十番以内にも入れなかったって。ざまーみろだ(笑う)。

夏美　愛先輩。福沢先輩に恨みでもあるんですか？

愛　　そういうわけじゃないんだけどさ。なんか勉強ばかりしてるヤツってむかつくんだよね。

聡美　わかる、なんか嫌だよね。

愛　　ゆき絵ってテストほとんど百点じゃない。全然面白味がないんだよ。

聡美　一緒に話していると馬鹿にされてる気がするし。

愛　　あれ馬鹿にしてんだよ、ほんとのところ。あたし、ゆき絵と同じクラスじゃない。もう、ほんと嫌になる。こないだの国語の時間、詩の朗読だったんだけどさ。「私は海を見たことがない」って詩あるじゃない。あれをさ、あたし、「タワシは海を見たことがない」って読んじやったんだよ。そしたら、ゆき絵、プって吹き出してさ。

茉莉　そりゃ笑うだろ。タワシが海を見るか。

愛　　だからさ、茉莉が笑うんなら許せるんだよ。でもさ、ゆき絵だと許せないんだよね。笑いから「あなたほんとに馬鹿ね」って伝わってくるんだよ。

茉莉　実際そうじゃん。

愛　　そうだけどさ。

聡美　でも今回の一位転落はショックだったろうね。

愛　　いい経験。ずっと一番なんて人間としておかしいよ。

聡美　わかる。

愛　　でしょ。でしょ。あれ、何であたしたちゆき絵の話してんだ。

聡美　愛が始めたんでしょ。

愛　　そうだっけ。

聡美　で、何で集合かけたのよ。

愛　　そうそう、それぞれ。みんな、見て驚けよ。

愛が新聞の広告を取り出す。

愛　　じゃーん。

聡美　何それ。

愛　　見ればわかるって。

聡美　第十二回オクトパスフォトコンクール。

夏美　オクトパスってあの有名なカメラの会社ですか。

愛　　(うなずく)。

聡美　それで。

愛　　応募資格は不問。グランプリは一点百万円。更に金賞一点五十万円。銀賞二点十万円。

聡美・茉莉・夏美　すごーい(すごいですねといった驚きの声)。

愛　　写真部で挑戦してみようよ。写真部ってさ、運動部なんかと比べると地味じゃない。はっきりいって学校でも馬鹿にされてるし。ここで存在をぱーっとアピールしようよ。

夏美　いいですね、それ。

聡美　いいじゃん。

夏美 私たちの中から受賞者が出れば新入部員も入ってきますかね。
聡美 このままだと私たちが卒業すれば来年は夏美一人だもんね。
夏美 先輩、それはきつついな。
聡美 夏美一人になっても写真部続けるの？
夏美 まあ、そのつもりですけど。でも、そうならないようにここでアピールするのもいいかなって。
聡美 写真って、どんな作品でもいいの？
愛ちゃんとテーマがあるよ。
聡美 テーマは？
愛（新聞を見て）テーマは、自由。
茉莉 じゃ、ないんじゃない。
愛 最後まで聞いて。（新聞を見て）「テーマは自由。ただしその写真を写した時のあなたのときめきを感じられるもの。そのときめきが写真を見る側に伝わってこないものは審査の対象からはずします」
聡美 なんか難しいね。
愛 まだ続きがあるんだ。（新聞を見て）「ときめきといっても人それぞれです。自分なりのときめきを写真にしてください。あなたの『ときめきフォトグラフ』を待っています」
聡美 自分なりのときめき…か。

考え込む。

夏美 締め切りはいつですか？
愛 八月三十一日、消印有効だって。
夏美 締め切りまで二ヶ月もあるんですね。

聡美が写真を一枚取り出しそれを眺めている。
愛がその写真を後ろから見て。

愛 聡美、誰それ？

聡美が写真を背中にもっていく。

愛 誰よ、それ。
聡美 何でもないから。
愛 その写真の子、聡美のときめき？
聡美 …
愛 そうなのね。誰、誰、誰、誰？つきあってるの？
聡美（首を振って）名前も知らない。うちの学校じゃないから。
茉莉（聡美の背中の写真を見て）武田俊哉。
聡美 知ってるの？
茉莉 隣の二つ森中学に通ってる。野球部、ピッチャー。

聡美 何で…
茉莉 塾が一緒。
聡美 彼女は？
茉莉 俺、そういうことに興味ないから。
愛 聡美、どうする？
聡美 どうするって。
愛 憧れだけでいいの？彼氏にしたいと思わないの？
聡美 それは…
愛 思うでしょ？
聡美 (うなずく)決めた。ときめきは恋。
夏美 沖田先輩、先輩はこの写真を送ることで決まりですか。
聡美 (首を振って)私、彼の写真撮りまくる。
愛 写真撮るだけじゃだめだよ。行動しなくっちゃ。
聡美 わかった。ときめきのラストは彼とのツーショットにする。
愛 そうそう。
夏美 自信あるんですか。
聡美 (首を振るって)どうしたらいいだろ。
愛 やっぱ、まずは何とかしてメアドを聞き出すこと。
聡美 どうやって。
愛 まずはきっかけ作りじゃない。まだ話したこともないんでしょ。
聡美 彼の前でハンカチを落とすとか。
愛 ハンカチ？そんな手、古すぎるよ。出会いは偶然と自然さを装って演出しなくっちゃ。例えば、彼の前で怪我をすとか。
聡美 その方がわざとらしくない。
愛 だからそれを自然にやるのよ。
聡美 どうやって？
愛 (少し考えて)さて、ここに聡美のときめきの武田君が立ってるとしよう。思い浮かべて。向こうから一人の女の子が駆けてくる。それは、七つ森中学校三年、沖田聡美。彼を追い抜いたとき聡美は突然つまずいて倒れる。「あっ」(そう言って倒れる。立とうとする聡美、しかし彼女は立つことができない)
武田が聡美に近づく、そして。
「どうしたんだい」
「大丈夫なんでもありません。(目を逸らして)しめしめうまくいったぜ」
痛みをこらえてというより、こらえるふりして立ち上がる聡美。そして再び聡美は倒れる。今度は武田君の胸の中に。
「あっ」
(聡美を支える武田)
「無理しちゃだめだ」
「足を捻挫してしまったみたいです」
「これはいけない、ひどい血だ」
茉莉 なんで捻挫でひどい血なんだ？
愛 それは…

茉莉 それは？
愛 あまりの痛さにびっくりして鼻血が出たのよ。
茉莉 なるほど鼻血ね。
愛 武田は自分のハンカチを破いて捻挫の手当をする。
茉莉 鼻血の方はいいの。
愛 それはこれから。
「痛くて、痛くて鼻血が止まらないわ」
「おお、ひどい鼻血だ。(武田はカバンからティシュペーパーを取り出す)僕のティシュペーパーを使ってくれ。フランス製のティシュペーパーを」
「(といって自分の鼻にティシュを詰め込む)。
「ありがとうこんなすてきなティシュペーパーを私のために。必ず洗ってお返しします」
茉莉 (笑いながら)そんなの洗ってどうするんだよ。
愛 じゃ、鼻血はなし。捻挫だけにする。
「ごめんなさい、あなたのすてきなハンカチをこんなにしてしまって。あなたに何かお礼をしなければ」
「お礼なんて」
「いえ、それでは私の気が済みません。よろしければメールアドレスを教えてください」
「わかったよ」
というわけで、無事メアドを聞くことができる。めでたし、めでたし。

夏美が拍手をする。

茉莉 愛。俺、武田のメアド知ってんだけど。
愛 ！
茉莉 さっき言ったろ。武田と塾が同じだって。塾の連絡網の関係であいつのメアド知ってたんだ。
愛 そんならそうと早く言ってよ。
聡美 茉莉、あとで教えてくれる。
茉莉 いいけど、俺から知ったって言わないでくれよ。
聡美 OK。あー、なんかわくわくしてきた。
愛 ときめきか、あたしはどうしよっかなー。この前ふられちゃったばかりだし…。でも、やっぱ愛だよなー。
夏美 いいですね。
愛 夏美もいるの、彼？
夏美 つきあってる人はいないんですけど、興味はあります。
愛 そうだよな。誰だって興味あるよね、愛。
茉莉 愛ね、俺は、愛とかどうも苦手なんだよね。なんかこそばゆくって。
愛 茉莉のときめきって何？
茉莉 スクープ。特ダネを取ること。すごい事故とか火事とか。
愛 じゃあさ、それが起こるまで待ってるわけ。

茉莉 起こらなかったら起こすとか。
愛 それじゃ犯罪でしょうが。
茉莉 それくらい考えないとね。人の不幸は密の味ってさ。
聡美 夏美は？
愛 夏美は決まってんじゃない。でしょ、
夏美 まあそんなところですよ。
聡美 ああ、自然系のヤツね。前に写真コンクールに入賞したよね。
夏美 子ども写真コンクールですけどね。
聡美 あれ何撮ったんだっけ。
夏美 クモの巣です。
愛 クモの巣なんて普通撮らないよね。
聡美 またクモの巣で応募するの。
夏美 今度は鳥にしようかなって。
愛 鳥、夏美のときめきは鳥。
夏美 まあ、そうしよっかなーって。
愛 なんかジジ臭いときめきだよね。
夏美 ジジ臭いですか、まいったな。
愛 ごめん、ババ臭いの間違い。
聡美 でもこんなところじゃスズメとかカラスしかいないでしょ。
夏美 もうちょっといえますけど。
愛 確かにコンクールじゃ自然系ってうけるんだよね。でもあたしはときめかないかなー。
愛のときめきは愛。やっぱりそれっかないよね。
聡美 みんなのときめきが見えてきたところで、いよいよ写真部活動開始って感じ。
愛 よっしゃー、円陣組もう。

愛、聡美、夏美が円陣をくむ。
茉莉はそこに入らない。

愛 茉莉。
茉莉 キャラじゃない。
聡美 茉莉はいいよ。うちらだけでやろっ。
愛 百万円目指してがんばるぞー。
聡美・夏美・愛 オー。

四人が帰っていく。
暗転

◇ 1

公園のベンチと椅子が人間の姿をして浮かび上がってくる。

ベンチ 1 あーやっと、騒々しい連中が帰っていった。
ベンチ 2 私は、七つ森公園のこの静けさが好き。

ベンチ 3 それにしても、最近の若者たちはどうだ。

椅子 1 この公園で一番うるさいのは若者たち。

椅子 2 あの子らは礼儀というものを知らない。

ベンチ 1 一番許せないのはあの子らが私の上に靴のまま平気でのこと。

ベンチ 2 不愉快。

ベンチ 1 私の上から引きずり降ろしてやりたい。

椅子たちがうなずく。

ベンチ 1 若者。

ベンチ 2 馬鹿者。

ベンチ 3 我が物顔。

椅子 1 我が儘。

椅子 2 わかんないもの。

ベンチ 1 若者。

椅子たち 馬鹿者。

暗転

◆七月三日(火)

夏美がケヤキの大木の方角の写真を撮っている。

何を撮っているのだろうか。

しきりにシャッターを切っている。

そこに写真部の仲間が集まってくる。

愛 聡美、気持ちは固まった。

聡美 うん。これ(携帯のメールに書かれた文を愛に見せる)。

携帯に書かれた内容を愛が読む。

愛 「はじめまして。私、七つ森中学校の沖田聡美です。写真部員です。野球の県大会であなたの写真を撮りました。この写真は今、私の「ときめき」です。今度、私と会っていただけませんか。私の写真も送ります。」か。

聡美 よし、送る。

まるで聡美の心臓の鼓動が聞こえてくるようだ。

聡美はみんなの见ている前で携帯でのラブレターを送る。

聡美 アー、送っちゃったどうしよう。やっぱり送らなかったほうがよかったかな。

愛 もう送っちゃったんだからあとはさ、幸せの青い鳥が飛んでくることを待ってればいいの。

聡美 幸せの青い鳥か…

聡美が空を眺める。
空からカラスの鳴き声が聞こえてくる。

聡美 もしだめだったら。
愛 それはその時考えればいいじゃない。
聡美 もし会ってくれることになったらどうしよう。
愛 映画でも誘ったら。
聡美 どんな。
愛 やっぱ恋愛映画でしょ。怪獣映画はやめた方がいい。
聡美 怪獣映画なんてだれも誘わないよ。
愛 あたし、誘った。
聡美 何見に行ったの。
愛 えっとね『ゴジラ対…』なんだっけ、あー、『ゴジラ対、モロヘイヤ』
茉莉 なんだそりゃ、ゴジラが闘うのは野菜かい。
夏美 それでどうなったんですか。
愛 その結末を私に言わせる気。まっいいか。どっかーん。失敗。大失恋。なんせ映画の途中で寝ちゃったからね。

愛が笑い、その笑いが広がる。
松本先生が現れる。

松本先生 こんにちは。

愛 マッチー。

聡美 松本先生。

松本先生 ずいぶん楽しそうじゃない。

愛 あたしたち青春してっから。

松本先生 ねっ、福沢さんのこと何か聞いてない。

聡美 ゆき絵、どうかしたんですか。

愛 ゆき絵、今日は学校休みだったじゃん。

松本先生 実は、昨日から家に帰ってないの。

聡美 ゆき絵が？

愛 えー。

茉莉 事件？

松本先生 それはないかな。本人から家に連絡はあったみたいだから。

愛 それって家出したっていうこと？

松本先生 …そうなのかな。

愛 マッチー、ゆき絵、この前の試験で学年一位を逃したんで家出したの？

松本先生 …私もよくわからないんだけど…

愛 きっとそうだな。あれ、すごいショックだったはずだもん。

松本先生 ねっ、彼女が今仲良くしてる人って誰？

愛 誰もいないんじゃない。ゆき絵、友達と仲良くするタイプじゃないし。

松本先生 そうなの…。ありがと。ねっ、もし何かわかったら連絡してね。

それぞれがわかりましたという反応をする。

松本先生がその場を去る。

愛 家出か、学年一番逃したくらいで。やっぱ勉強できるヤツはここ（胸を叩いて）が弱いね。

夏美 一昨日会ったときは、家出するような感じじゃなかったですけど。

そこに携帯電話の着メロが流れる。

聡美が携帯電話を取り出す。

愛 聡美、誰から。

聡美 武田君から。

愛 もう返事返ってきたんだ。

聡美 嫌な予感がする。

愛 何で？

聡美 だって早過ぎるもの。

愛 とにかく開けてみなよ。

聡美 怖いな。

そういいながら勇気を出してメールを開く。

メールを覗き込む聡美。

愛たちも一緒に見る。

そこには「悪いけど、彼女いるから」と書いてあった（ただ観客にはそれは見えない）。

聡美 （うなだれる）

愛 何これ、たったこれだけ。「悪いけど、彼女いるから」。もうちょっと書き方あるでしょうが。

聡美 （泣き始める）

愛 聡美。

聡美 （泣き方が激しくなる）

愛 聡美。泣かないで、何かあたしまで泣けてきちゃうじゃない（そういいながら愛も泣き出す）。

聡美 愛（といいながら愛に抱きついていく）。

愛と聡美は二人の世界に入って泣いている。

夏美 先輩。

茉莉が先輩二人を気にする夏美を引き留める。

聡美と愛には気づかれないうに放っておけという意味で首を振る。

聡美 私、帰る。

愛 一緒に帰ろ。聡美、今日はおごるよ。こないだのお返し。

聡美 (うなずく)

愛 (泣きながら)あたしたち先帰るから。

そういつて二人は泣きながら帰っていく。

夏美 いいんですか。

茉莉 いつものことだから。この前、愛が失恋したときは今の反対だったろ。

夏美 茉莉先輩はこれからどうするんですか。

茉莉 まあここにいても何か撮れるわけじゃないし、ぶらぶら歩いてみるかな。夏美は？

夏美 もう少しここで写真撮っていきます。ここけっこういいところなんで。

茉莉 じゃあ、俺行くわ。

茉莉が帰っていく。

夏美 さよなら。

茉莉を見送った後、夏美はまたケヤキにカメラを向け、写真を撮り出す。夏美はオープニングの時と同じく、双眼鏡を撮りだし、何かを眺めている。その何かを追って下手の方に双眼鏡を向けたとき、その中にゆき絵の姿が入る。

福沢ゆき絵が現れる。

夏美は双眼鏡を目から離す。

夏美 福沢先輩。

ゆき絵 ^{おととい}一昨日の続き。

夏美 一昨日の？

ゆき絵 何見てたのか教えてよ。

夏美 あー。

ゆき絵 秘密にするから。

夏美 先輩。

ゆき絵 なに…

夏美 あっ、いいんです。なんでもないです。

ゆき絵 …

夏美 (双眼鏡を渡しながら)福沢先輩、これで見てください。

ゆき絵が双眼鏡を覗く。

夏美 あそこです。

ゆき絵 何これ、かわいいー。
夏美 オオタカの子どもです。
ゆき絵 オオタカって、鷹？
夏美 はい。
ゆき絵 鷹がこんなところにいるの？
夏美 まだ、誰も気づいてないようなんですけど。
ゆき絵 なんで秘密にしてるの？
夏美 オオタカの子どもって高く売れるんです。知られると捕られちゃうかもしれないんです。
ゆき絵 それで秘密にしてんだ。それにしてもかわいいねこれ。
夏美 三郎丸です。
ゆき絵 名前つけたんだ。三郎丸ってことは太郎丸と次郎丸もいるわけ？
夏美 はい。太郎丸と次郎丸は無事巣立てたんです。
ゆき絵 三郎丸は？
夏美 まだ巣立てないんです。
ゆき絵 ねっ隣にいるの…
夏美 父親のロッキーです。
ゆき絵 ロッキー？三郎丸の父親はロッキー。
夏美 変ですか？
ゆき絵 (頷いて)変。
夏美 …
ゆき絵 おー、もう一羽飛んできた。
夏美 母親のキャサリンです。
ゆき絵 キャサリン…。(双眼鏡で覗いて)何か捕まえてる。あれ、鳩だ、わー、ちぎってる。(双眼鏡から目をはなして)これってけっこう残酷だね。
夏美 まあ。
ゆき絵 鶴田ってさ、けっこうあれだね、見かけによらず…
夏美 残酷な趣味を持ってる、ですか？
ゆき絵 …、楽しいの？
夏美 (うなずく)でも、私の本当の気持ちはたぶん誰にもわかってもらえないと思います。それでいいんですけど。
ゆき絵 本当の気持ちってどんな気持ち。
夏美 聞いてくれます。
ゆき絵 (うなずく)
夏美 私、去年までは、小鳥が大好きで、鷹はどっちかというとは好きじゃなかったんです。
ゆき絵 そうなんだ。
夏美 この公園で去年はじめてオオタカが巣を作って、去年も3羽の子どもが生まれて、はじめは鷹の子どもってかわいいなって思ったんです、さっきの先輩みたいに。でも、鷹が自分の大好きな小鳥を襲ってるのを見て、すごく鷹が嫌いになっちゃって。鷹が襲うのを見る度に、「逃げて、逃げて」って叫んでました。
ゆき絵 で、

夏美 死んじゃったんです。去年、三羽とも。餌がなくて。

ゆき絵 …

夏美 巣の中で死んでる子ども見たら、なんかそれとっても残酷で。

ゆき絵 そうだったんだ。

夏美 最近は、私、襲う鷹も応援してるんです。あの三郎丸も無事巣立てばいいなって。

三郎丸、今の私のときめきなんです。

ゆき絵 ときめきね。なんかちょっとわかった気がする。

夏美 先輩、今度は先輩の番です。

ゆき絵 私の？

夏美 一昨日読んでた本。

ゆき絵 ああ、あれね。知りたい？

夏美 どうしてもってわけじゃないですけど。

ゆき絵 まっいっか。(本を取り出して)はい。中見ていいよ。

夏美 ありがとうございます。

夏美がページをめくる。

夏美 これ、数学の参考書…ですか。

ゆき絵 そっ。変でしょ、公園で数学の参考書読んでるなんて。まっ、どう思われようとかまわないんだけどさ。でもやっぱ隠しちゃうんだよね。

夏美 中3になるとこんなのやるんですか。

ゆき絵 それ、高校の数学なんだ…。

夏美 私、数字見てると、目が回っちゃうタイプなんですよね。数学苦手なもんで。先輩は、楽しいんですか。

ゆき絵 (うなずく) 秋にさ、たくさんの枯れ葉が風に舞うときあるじゃない、すごくロマンチックで。あんな時に私、方程式を思い浮かべちゃうんだ。

夏美 方程式…

ゆき絵 今もさ、ここに映ってる光と影ってすごく複雑で面白くって、図形の証明問題考えたりしちゃうんだよね。まっ、わかってもらうのは無理だと思うけど。

夏美 (笑う)

ゆき絵 …

夏美 よくわからないけど、わかってもらえないことがわかる気がします。似てますね、私たち…、変なところ(笑う)。

ゆき絵 似てるかも(そういつて笑う)。

夏美 なかなかわかってもらえませんかよね。

ゆき絵 「みんな違ってみんないい」って詩が教室にはってあるんだ。

夏美 それ知ってます。国語の時間にやりました。

ゆき絵 担任の松本がこの詩が好きでさ。でも私の違いはよくないみたいなんだよね。

夏美 先輩の違い？

ゆき絵 うちのクラスの学級目標なんだと思う。

夏美 ？

ゆき絵 「ひとりぼっちをつくらない」。これ、私にとってはけっこう辛くて。だって

私一人でいるとき大好きだから。私、ひとりぼっちが好きなのに、ひとりぼっちが好きという違いはだめなんだよね。

夏美 …

ゆき絵 知ってるの？

夏美 知ってるって？

ゆき絵 知ってるんでしょ、私のこと。

夏美 家出、のことですか。

ゆき絵 家出？家出っていうのちょっと違うな、どっちかっていうと学校出だね。

夏美 どうして…

ゆき絵 担任の松本、とっても優しいんだ。悩んでいたり苦しんでいるのを放っておけないんだよね。

夏美 いい先生なんですね。

ゆき絵 そうなんだけど。でも、その優しさがとっても辛いときがあつてさ。

夏美 …

ゆき絵 昨日の昼休みにいつも通りに教室で数学の本読んでたんだ、一人で。そしたら松本「悩みがあったら相談して」って。別に何もないんだ。数学勉強してるのはさ、みんなが外でサッカーしてるのと同じだと思うんだけど、松本にはいつもと違う私に見えたんだと思う。学年一番じゃなくなったから。

私、軽い気持ちで「悩みなんてありません」って答えたんだ。そしたら松本、「今までよくがんばったよね。でもそんなにがんばらなくてもいいのよ」なんて言うんだ。私それ聞いて泣きたくなっちゃってさ。自分のこと全然わかってもらえないことに。それでさ、松本の優しさに息が苦しくなって、そこから逃げ出しちゃったんだ。

もう最悪だよ。あれっておもいっきり学年順位を気にしてるって思われることしちゃったわけじゃない。それを弁解しようとしてもすればするほど誤解されるし。

私、なんか何もかもが嫌になっちゃって。それで家にも帰らなかったんだ。

夏美 そうだったんですか。

空には美しい夕焼けが現れている。

ゆき絵 私さ、一度写真に興味持ったことあるんだ。

夏美 …

ゆき絵 こんな風に、夕焼けがきれいで、どうしてもこの夕焼けを残しておきたいって思って、カメラ持ってきて写真撮ったんだ。何枚も。で、現像したら、全然違うんだよ、私が見た夕焼けと。こんなじゃないぞーって。それ以来なんかね。あたしなんでこんな話してんだ。でも、話したらなんかスッキリした。スッキリしたら、お腹へっちゃった。

夏美 （笑う）

ゆき絵 なんかいろんな思いがお腹にたまってたのかな。実は、昨日から何も食べてないんだ。

夏美 ほんとですか。

ゆき絵 もうお腹ぺこぺこ。

二人が笑う。

ゆき絵 私帰る。もうどう思われてもいいや。(帰る支度をする)それじゃ、さようなら。

夏美 さようなら。

ゆき絵 (少し歩き始めてから立ち止まり、夏美の方を振り向いて)三郎丸、巢立つとい
いね。

夏美 はい。

ゆき絵が帰っていく。

暗転

◇ 2

夜の公園。

公園で大騒ぎをする中学生たち。

夜の公園、椅子やベンチが倒されている。

公園のベンチと椅子の言葉を話すものたちが、人間の姿でその後ろに横たわって
いる。

一人の女性が現れる。

ゆき絵の担任・松本由美子である。

生徒1 おっ、誰かと思えばマッチーじゃん。

生徒2 (からかって)マッチー。

松本先生 あなたたち…福沢さんのこと知らない。

生徒1 福沢？知らねーよ。

松本先生 あなたたちこんな時間に…

生徒1 はっ？公園で説教かよ？

松本先生 (倒れているベンチを見て)これ誰が…

生徒1 はっ？何もしてねーよ。最初っからこうなってたんだよ(といってベンチを蹴
る)。

松本先生 やめなさい(と言って生徒1を後ろから押さえる)。

生徒1 なにすんだよ(と言って腕を振り払って松本先生を突き飛ばす)。

松本先生が倒れる。

笑う生徒たち。

生徒1 だっせー。

生徒2 マッチー、こんなところ一人で来てちゃあぶねーよ。

生徒たちは「マッチー」を連呼し、笑いながら去っていく。

ベンチ2 先生も大変だ。

ベンチ 1 若者。
ベンチ 2 馬鹿者。
ベンチ 3 我が物顔。
椅子 1 我が儘。
椅子 2 わかんないもの。
ベンチ 1 若者。
椅子たち 我が物顔。

松本先生が大きく息を吐き、松本先生がゆっくり立ち上がる。
そのとき松本先生の携帯電話が鳴る。

松本先生（携帯電話に出て）はい、はい。福沢自宅に帰ったんですか。よかった。はい。
はい。わかりました。そうします。

松本先生は再び大きく息を吐く。
そして倒れているベンチや椅子を元に戻していく。
それを複雑な表情で見つめる椅子とベンチ。
暗転

◆七月八日(日)

夏美が、公園でオオタカの写真を撮っている。
突然、夏美は写真を撮るのをやめ、何かが飛んでいくのを見つめる。
夏美は、それを追って走って公園を出て行く。
すれ違う、茉莉。

茉莉 夏美。
夏美 (声)ちょっと。

愛がやってくる。

茉莉 よっ。
愛 あー、もう最悪。
茉莉 どうしたんだ。
愛 説教くらっちゃったよ。熊に。
茉莉 どうして。
愛 どうしてって、教室の黒板に落書きしてただけ。
茉莉 落書きって、何でわざわざ日曜日に。
愛 それ、写真に撮ってコンクールに出そうと思ってさ。
茉莉 ときめきは落書きかい。
愛 ときめきは愛なんだけど、なかなか愛の写真なんて撮れないじゃん。それでさ、愛し合う二人の絵を描いてそれ撮ろうと思ったんだ、こうやって二人がキスしてる絵…。休みの日しかできないじゃない、そんな絵描いて写真に撮るの。

茉莉 それで。

愛 なんか描いていた絵が、担任の熊に似てきちゃったんだ。それで面白くなって熊の絵を黒板中に描きまくったんだ。で、振り向いたら教室の後ろに熊が立ってた。ひえー、これはくまだったってんだよ。

茉莉 で。

愛 熊のヤツ滅茶苦茶怒って、長ーい説教が始まってさ。

茉莉 (笑ってる)

愛 茉莉ってさ、人の不幸を心から楽しんでない。

茉莉 世の中そういうもんでしょ。

愛 (笑って)もう人の不幸待ってるなんてやめたら。

茉莉 (笑って)きれい事いうなよ。人の不幸は蜜の味って、誰でもほんとは不幸を楽しんでる。愛だって。

愛 あたしが…、

茉莉 そう、

愛 あたしは、ない。

茉莉 あるって。

愛 …

茉莉 お前、ゆき絵が学年一番落ちたこと喜んでたじゃん。

愛 ゆき絵は、仲間じゃないじゃん。あたしたちの中では絶対ないって。

茉莉 聡美のことは？

愛 聡美？

茉莉 ホットしたんじゃない。

愛 …

茉莉 聡美がああなったこと。

愛 どうして…

茉莉 悔しいじゃん。自分は振られたのに聡美だけうまくいったら。

愛 思ってるわけじゃないじゃん。聡美は親友だよ。

茉莉 ま、そういうことにしてもいいけどさ。

愛 そういうことにしてもって、本当にそうなんだから。茉莉、あんたが自分が人の不幸を喜ぶ人間だからってあたしまで一緒にしないでよ。あたしには人の不幸は蜜の味じゃないから。

そこに聡美が走ってやってくる。

聡美 茉莉、何かあっちで事故があったみたい。

茉莉 事故。

茉莉はにやりと笑って、聡美が指さす方向に向かって走っていく。

憮然としてその場に立ちつくす愛。

愛は公園の椅子にその怒りをぶつけたあと、茉莉の後を追う。

聡美がそれに続く。

暗転

◇ 3

公園のベンチと椅子が人間の姿で浮かび上がってくる。
ベンチと椅子に若者たちが落書きをしている。
その落書きしている若者たちに向かって、ベンチと椅子たちが何かぶつぶつ呟いている。呟きは「若者」「馬鹿者」「我が物顔」「我が儘」「わかんないもの」。
その呟きは少しずつ大きな声となっていく。
若者たちが人の気配を感じて去っていく。
椅子たちは若者が去っていった方を見つめる。

ベンチ 1 若者
椅子たち 我が儘

暗転

◆ 数時間後の公園

愛と茉莉が舞台中央にあるベンチに座っている。
聡美がやってくる。

茉莉 夏美は…。

聡美 もっと詳しい検査が必要だけど、今のところ脳には異状はないって。骨折もないって。奇跡だって言ってた。

愛と茉莉はほっとした表情を浮かべる。

聡美 ただね。

愛 ただ？

聡美 ガラスが目刺さってて、このまま放っておくと大変みたい…

愛 大変って、目が見えなくなるとか…

聡美 そういうことなのかな。

茉莉 …

愛 これからお見舞いに行っても大丈夫かな。

聡美 今日はだめだって。明日みんなで行こう。

愛 (うなづく)。

突然、茉莉が泣き出す。

愛 茉莉。

聡美 どうしたの。

茉莉 俺、あの事故が起こったとき凄く嬉しかったんだ。これで俺が望んでいた写真が撮れる。

俺にもチャンスが巡ってきたって…。そして写真を撮りまくった。夏美の事故の写真を…

聡美 あのときは事故にあったのが夏美だってわからなかったんだから。しかたないじゃない。

茉莉 しかたなくない。

聡美 …

茉莉 それだけじゃないんだ。

聡美 …

茉莉 あのととき新聞社の人が俺のところに来てさ「君の撮った写真借りられないかな」って言ったんだ。俺、渡しちゃったんだ、夏美の事故の写真撮ったデータ。

聡美 …

茉莉 その時は事故にあったのが夏美だってわかってた。

茉莉は泣き続ける。

愛 茉莉、新聞社に行こう。

茉莉 …

愛 新聞社に行ってさ、データ取り戻してこよう。

聡美 私も行く。

愛 茉莉、新聞社ってどこ。

茉莉 …本気？

愛 (うなずく)

茉莉が新聞社からもらった名刺を出す。

愛 さっ、行こう。

茉莉 …ありがと。

愛 (プッと吹き出して)何いってんだよ、茉莉らしくない。

茉莉 …

愛 茉莉、嘘ついてごめん。

茉莉

愛 あのとときあたし、喜んできた。

茉莉 …

愛 同じだから、あたしも…。あたし、自分を誤魔化すし、嘘もつくし…、最悪だし。

茉莉 …

愛 でも、今、新聞社に行こうとしているあたしも、あたしだから。

茉莉 …

聡美 ねえ、いったい何の話してるの？

愛 何って、何だろ。

聡美 なんでもいいけど、早く行こう。

愛 うん。

三人が歩いていく。

暗転

◇ 4

公園のベンチと椅子が人間の姿で浮かび上がってくる。

椅子たちは愛たちが去っていった方を見ている。

椅子たちは何も語らず視線で「彼女たちのことがわからないという」思いを伝えようとする。そして再び愛たちが去っていった方を見つめる。

ベンチ 1 若者。

椅子たち わかんないもの。

暗転

◆七月十五日(日)

夏美の母が夏美を車椅子に乗せて公園を散歩している。

夏美の目には包帯が巻かれている。

母 お医者さんも奇跡だって。

夏美 写真コンクールはだめだね。

母 治れば、いくらでも写真が撮れるから。

夏美 …。

母 手術は簡単だって。よかったね。夏美。

夏美 ここで止めて。

母 …

夏美 (耳を澄ます夏美)。

ゆき絵が歩いてきて車椅子の前で立ち止まる。

ゆき絵は双眼鏡を首にぶら下げている。

ゆき絵 鶴田さん。

夏美 福沢先輩。(母に)福沢先輩、中学校の先輩の。

母 こんにちは。

ゆき絵 こんにちは…

夏美 お母さん。ちょっと福沢先輩と二人にしてくれる。

母は二言三言夏美に何か話した後、その場を離れる

ゆき絵 鶴田さん。

夏美 先輩。夏美って呼んでください。

ゆき絵 …夏美。

夏美 はい。

ゆき絵 手術するんだって。

夏美 (うなずく)

ゆき絵 大丈夫なの、公園なんかに来て。

夏美 先生に頼んで、許可してもらいました。どうしてもここに来たくて。

ゆき絵 そうなんだ。

夏美 先輩、私、馬鹿やっちゃいました。

ゆき絵 馬鹿？

夏美 あの日、三郎丸が巣立ったんです。でも三郎丸ったらふらふら飛んで、道路に降りちゃったんですよ。「危ない」と思って助けに行ったら自分が…

ゆき絵 そうだったんだ。

夏美 三郎丸、あの後どうなったんだろう。

ゆき絵 (夏美の耳元で)元氣。

夏美 (えっ)、どうして…。

ゆき絵 あの後、私ずっとここに来てるんだ、夏美のときめきを見に。

夏美 私のときめき…

ゆき絵 大丈夫。三郎丸、とっても元氣だから。

夏美 先輩。

ゆき絵 あとね、私、三郎丸の写真も撮ったんだ。でもぼけちゃって。夕焼けの時と同じ。私、才能ないから。

夏美 先輩。今その写真あります。

ゆき絵 うん、(写真を取りだして)これ、

夏美 後で焼き増ししてくれますか。

ゆき絵 こんな写真でいいならあげる。

夏美 ほんとですか？

ゆき絵 はい(そういつて写真を渡す)。

夏美がその写真を手にする。

夏美 見たいな、この写真。

夏美がその写真をアルバムの中に入れる。

ゆき絵がそれを手伝う。

ゆき絵 これ、夏美が撮った写真？

夏美 はい。

ゆき絵 見ていい。

夏美 はい。

ゆき絵が夏美が撮ったアルバムの写真を見る。

ゆき絵 夏美…、やっぱり私の写真返して。

夏美 …

ゆき絵 私、馬鹿だよ、夏美にこんな写真持ってきたりして。三郎丸撮ったらなんかとってもうれしくなっちゃって、写真もなんか面白いかな、なんて思っちゃって。それ夏美に報告したくって、あーあ恥ずかしい、私のピンぼけ写真この仲間入りするのは無理だ。

夏美 先輩。

夏美はアルバムを持っているゆき絵の手をたどってアルバムをつかみ、そしてそのアルバムにとって胸に抱きしめる。

アルバムを抱きしめるその手は震えている。

ゆき絵 …

夏美 ピンぼけでもいいんです。

ゆき絵 …

夏美 先輩…(言葉が続かない)。

ゆき絵 どうしたの。

夏美 うれしくて…

ゆき絵 …

夏美 手術、難しいみたいなんです。

ゆき絵 誰かがそう言ったの？

夏美 母は簡単な手術だって言っていました。

ゆき絵 そんなら大丈夫だよ。

夏美 わかっちゃうんですよ。

ゆき絵 …

夏美 母、嘘が下手だから。でも、がんばってみます。あっ、がんばるのはお医者さんで私じゃないんですけど。でも…私なりにがんばってみます。

ゆき絵 私、がんばらなくていいなんて言わないよ。

夏美 はい。先輩の写真のためにも、治さなくっちゃ。

「夏美」という声が聞こえてくる。

写真部の先輩たちが現れる。

ゆき絵は首にぶら下げていた双眼鏡を外して背中に持っていく。

夏美 先輩。

聡美 病院にお見舞いに行ったら、公園に行っただって言われて。

愛 こんなところに来て大丈夫なの。

夏美 病院より、ここの方がいいんです。

愛 ゆき絵はどうして(ここにいるの)？

ゆき絵 ちょっと。

聡美 夏美と知り合いなの？

ゆき絵 まあ、ちょっと。

愛 元気になった？も一あたしたちみんな心配したんだよ。家出なんかすっからさ。

ゆき絵 あー。

愛 もう、ゆき絵なんかさどんなに成績落ちたっていっても、絶対あたしよりは上なんだからさ。

茉莉 そりゃそうだ。

愛 あたしや、うらやましいよ。

ゆき絵 …

聡美 夏美。

夏美 はい。
聡美 何か私たちにできることってある？
夏美 できることですか？(考えて)特に…
聡美 何かないの？
夏美 (笑って)それじゃ、祈ってください。
聡美 祈る？
夏美 この公園のケヤキの大木。神が宿るって言われているの知ってます？
聡美 そうなの？
夏美 (うなずく、そして笑って)その木に、私の目が治るように祈ってください。
愛 簡単じゃん。ね。
聡美 うん。
茉莉 祈る？キャラじゃねーな。俺、宗教ないし。
聡美 夏美、手に持ってんの夏美が撮った写真？
夏美 はい。
聡美 見ていい？
夏美 はい。

聡美・愛・茉莉の三人が夏美の写真を見る。

「すごい」「かわいい」「いつ撮ったの」など三人が三人それぞれの感想、驚きの声を発する。

愛 これコンクールに送ればまた賞取れっかもしれないね。
聡美 取れるよこれ。
愛 あれ？何これ？ピンぼけじゃん。どうしたの夏美、こんなボケボケ写真。
聡美 これだけすごく変。
ゆき絵 それ、
夏美 福沢先輩！
愛 (笑って)夏美、こんな写真捨てちゃえば。
夏美 愛先輩！
愛 …
夏美 ときめきなんです。
愛 ？
夏美 それ、私のときめきフォトグラフなんです。
愛 (吹き出して)こんなボケボケ写真が？
夏美 愛先輩、笑わないでください、今の私の一番のときめきを。
愛 …なんだかわからないけど、わかった。

愛がアルバムを夏美に戻す。

夏美の母が現れる。

母 夏美。そろそろ病院に戻る時間よ。

それぞれがそれぞれの言葉を夏美に投げかけその場を去っていく。

夏美も母とともに去っていく。

見送るゆき絵。ゆき絵は誰もいなくなったのを確認しケヤキの木にいる鷹を双眼鏡で覗く。

暗転